

「立ってプレーする」考察

「立ってプレーする」ことについての理解がだんだん広まってきました。

立ってプレーすることを目標にするチームが出てきたということはすばらしい傾向であり、立ってプレーすることは、大課題となっている「ラグビーを easier に simpler にする」方策の key factor でもあるのです。

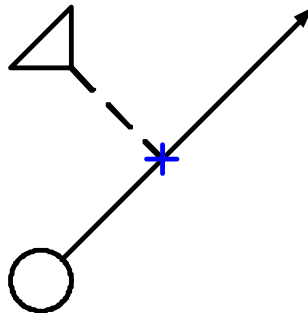
立ってプレーしようとする場合、問題なのは、立ってプレーしようという意識が欠如している場合であって、相手の状況や出方によって立ってられない場合があります。

その時にボールキャリアーはボディコントロールし、ボールを放し・置くことが第一で、味方はしっかりとラックを形成し、ボール確保から展開を継続しなければならないことはもちろんのことです。定義通りのラックを形成し、防御に相手をより多く集結させることは、相手のオフサイドラインを後ろに下げるといった利点もありますが、これとてもボールを持って横たわることで相手にとって脅威とならず、ラック形成の人数を少なくしてバックスの防御へ回らせることとなります。

例え捕まっても身体を回転させたり振ったりすることによって相手の手・腕が身体が外れることがあり、その瞬間を捕まえて脱出し展開することができます。プレーヤーが立ってプレーしようという意志がないからできないのであって、多くのプレーヤーが捕まったら寝るものと考えているために、残念ながら見られない自然なプレーです。直近の味方のポイントによって形成されたモールからの展開やドライビングも考えられます。捕まった状態でボールを足元へ落とし「ハンドラック」を形成することが以前にイングランドで提示されましたが、言葉としては現在はラックに含まれています。

問題は、ボールキャリアーの意志と出方によって、立ってプレーすることができるのに、その意志がなく、練習がなされていないために行われないことです。

意志が無いと判断される場合があります。



図A

1. ボールを両手に持って、突破できる状況でないのに突破しようとする。確実にタックルされる。
2. 頭を下げて相手に当たって倒れてラックにする。
これらは、相手も読んでいるための確に対応してくるので賢いとはいえません。



図B

3. 相手が抜くために斜めに走ってくると予想しているところに真っ直ぐ正面へ迫っていくことによってタックルをしにくくすることができます。
方策として大切なのは、何としても立ってプレーすることによってプレーを継続しようとする、即ち常に aggressive であることです。

その一

相手がタックルしてきても、止まって腰を落として構えると、当たってきても倒れないでもちこたえられます。相手の手がボールにとどかない(reachしない)ように腕を伸ばして保持し味方への継続をはかる。(止まることを勇気のないプレーというのは間違いですし、跳ね返すことも自慢にするほどのことではありません)

プレーの継続にはパスですが、多くの味方がサポートしていたならば、自然な形からドライビングモールも大きな前進を生み出してくれるでしょう。

その二 ハンドオフ



写真C

「asahi.comより引用」

<http://www.asahi.com/sports/spo/rugby/noside/TKY200609250224.html>

(その前にサイドステップやスワープでつかまらずに抜き去ることができれば最上ですし、その時にもハンドオフは有効です)

相手に捕まらないために、片手は自由にしておいて、ハンドオフすることは有効です。

片手が捕まりかけても離れる努力を怠って簡単に捕まってはなりません。ボールを持った片手で、捕まりかける中でパスも考えられます。離れたままなら全力で前進するのは言うまでもないことです。

その一・その二の重要な前提条件があります。

相手に対したら、サイドステップやスワープで捕まらずにかわすことができれば最上であるということです。そして、中途半端か外れた状態で倒れても(タックルが成立しても)パスができるかぎりパスして継続を計らねばなりません。

最後にチームとして大事な、もっとも重要なことでまとめます。

「立ってプレーする」ことは、ボールキャリアーの意識と努力だけでなく、味方のサポートがあって初めてできることであり、プレーとして生きてくるものです。豊富なサポートをする走力が無くては意味も効果もないものになってしまいます。基盤は走る力であることを認識し、ビジョンを掲げて挑戦してください。

2006.10.08

西川 義行